アテナイの両雄：アリステイデスとテミストクレス

渡辺　浩

A：先生こんにちは，寒い日がつづいています．今日のお話はペルシャ戦争のつづきですか？

Ω：そうだね．今日は誰でも記憶にあるギリシャ史のクライマックスの1つにふれることになる．前508～7年のクレイステネスの改革の後，アテナイはいわば民主主義の実験室となり，そこに見られた政治過程，行動，人物像は現代に至る西欧政治思想の原体験となった．この中からオデュッセウス以来の策謀家ともいえるテミストクレスと，対照的なアリステイデスとが登場する．

アリステイデスは生来穏和で均衡がとれ，身をつつしみ，正しいことには積極的，人に対しては公平だった．テミストクレスは少年のときから頭がよく，野心的で功名心が強く，行動にはムラがあり，常軌をはずれた行動で両親を困らせることも2度や3度ではなかった．こうして対照的な2人は少年時代からもう対抗意識を持っていた．

成人すると2人は政治の世界に足を踏み入れ，たちまち頭角をあらわしたが，その政治姿勢も対照的だった．たとえば“民衆の人気は変わりやすいものだから注意が必要”という忠告に対しては，アリステイデスは自分の行動になんら非難に該当する点がないことを以て，他方テミストクレスはまさにそのような民衆の心理を掌握・誘導する方法について自分は研究してきたことを以て，よりどころとするふうだった．テミストクレスは他人を敵と味方に区分し，自分のまわりにたえず仲間を集めて派手に接待し，なにか策をめぐらしていた．それだけに金集めにも熱心で，彼には黒い霧がつきまとっていた．金で動く人と見ればすぐ金を，それもときには公金を使ったらしい．

彼はつぎつぎと新しい提案をやや無鉄砲に民会に提出したが，アリステイデスはその欠点を指摘して反対にまわることが多かった．他方アリステイデスの提出する案件には，彼はすべて反対して，つぶしにかかった．

ペルシャ軍がマラトンに上陸したとき，これに立ち向かったアテナイの10人の指揮官は，1日交代で全軍の指揮をとることになっていたが，その1人だったアリステイデスはミルテイアデスの能力を認識して，自分の当番の日の指揮権を彼に委任するなど補佐につとめ，大勝利へとみちびいた．敗兵を収容したペルシャ艦隊がスーニオン岬の方角に動き出し，無防備のアテナイを急襲する戦略とわかると，激戦を終えたばかりの重装歩兵部隊は40 kmの陸路をアテナイに向かって走り出した．アリステイデスは多数の捕虜や戦利品の処理を託されて現地に残ったが，その処置には一点の疑惑の余地もなかった．こうしてミルテイアデスが国民的英雄となり，アリステイデスの名声も高まったとき，他人の名声に嫉妬深いテミストクレスは，夜も眠れない思いをした．

しかしミルテイアデスはさらに栄誉を加えようとして翌年1つの外征を試みて失敗し，失脚して死んだ．市民たちはペルシャとの戦争は終わったと思っていたが，少数の有識者は本番は今後にあると認識していた．なかでもテミストクレスはそのときのアテナイの活路は海上に求めるほかないと見とおし，市民たちに海軍思想を吹き込み，重装歩兵尊重の気風に冷水をかけ，アリステイデスを攻撃し，“正義の人”とよばれるその貴族的な人柄に対する民衆の反感をあおった．

ペルシャで軍艦建造中の情報が入ってきつつあったころ，彼の策動は実を結び，前493年アリステイデスの陶片追放が成立してしまった．これは“独裁者になる恐れのある者”の名を陶片に書いて投票し，10年間国外に追放するというもので，家柄，才能，業績とも抜群の人物だけがこれにかかった．

同じ年にラウレイオン銀山の新鉱脈発見による臨時国庫収入がアテナイにあったとき，テミストクレスはそれを“アイギナに対抗するため”の軍艦建造にあてる決議を提案し，成立させた．100隻の3段撓船が建造されると，彼は市民たちを説きつけて乗り込ませ，訓練を積ませた．こうしてアテナイははじめて大海軍国になった．

前490年空前の大軍を集結させたクセルクセスは，サルデイスからギリシャ諸市に対して土と水を献ずるよう求めた上で進発し，2本の架橋によってダーダネルス海峡を渡ったが，その兵力は陸上部隊の戦闘員だけで170万，艦船3000隻ともいわれた．諸市からはデルポイに託宣使が走り，屈従を望まない諸市は集まって盟約し，ま

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

ず諸市相互間の従来の紛争の終結と，イタリア方面のギリシャ人諸市への救援要請を決議した．

同盟の最大の決定問題は防衛線をどこに引くかだった．線を前方に出すほど多くの都市を結集でき，後方に下げればそれより前の都市はペルシャに屈従するしかなく，その兵力は敵側に動員されるので，兵力差に2倍できくことになるのだった．しかし補給の問題のほかに，母市から離れた戦線で戦う部隊は後退について安易になり，実力を発揮しないで終わる可能性が増大するのだった．第一次派遣軍は早々とテッサリアの北境に出向いたが，わずか数日後に撤退してしまい，テッサリアはペルシャに服した．

アテナイからの使がデルポイで受けてきた神託は，ほとんど絶望的な言葉のつらなりだったが，ただ“木の砦”だけが敵の手に落ちないことと，“聖なるサラミス”で滅亡するものがあること，の2点が注目をひいた．その解釈は専門家の間でも割れたが，テミストクレスは“聖なる”の形容詞を手がかりに，木の砦とは船のことであり，サラミスで滅亡するのは敵側だ，と主張して大勢を制し，敵が迫ったら都市を捨てて全市民が乗船し，海上で戦う方針を採択させ，軍艦の追加建造と海戦準備にとりかかった．また国外追放者の帰国を許した．

同盟諸市は第2次陸上部隊をスパルタ王レオニダスの下に天嶮テルモピュライに，海軍部隊をエウボイア島北端のアルテミシオンに送った．しかしオリュンピア祭礼期間中を口実に，同盟諸市の出兵の足並みは揃わず，レオニダスの兵力は先遣隊の寄せ集めわずか4,000にすぎなかった．海軍は270隻の約半数をテミストクレスの率いるアテナイ艦隊が占めていたが，彼に対する反感もあり，総司令にはあまり有能でもないスパルタのエウリュビアデスが選ばれた．

ギリシャにとっての神風が吹き，ペルシャ側に相当の損害が出た後で，アルテミシオンの海戦が行なわれ，劣勢のギリシャ側は互角以上の成果を得た．しかしそこに至る前提として，後退に傾くペロポネソス諸市の司令たちをなだめて，艦隊を数日間そこに留めるために，テミストクレスのまわりで大金が動いたとの噂があった．祖国防衛の戦略的要請と，艦隊の名誉ある行動と，避難の余裕を嘆願するエウボイア島民の願望と，彼自身の私慾との4目標を一筋に結ぶ線を彼は発見したらしい．

テルモピュライでレオニダスが玉砕すると，同盟は第3の陸上防衛線をコリント地峡に設定し，アテナイ防衛の望みは絶たれた．アテナイの全市民は子女をトロイゼン，アイギナ，サラミスに疎開させ，財宝は土中に埋めて乗船し，同盟艦隊とともにサラミスに集結した．380隻の約半数をアテナイの船が占めた．しかしここでも決戦場の選択をめぐる利害対立は深刻だった．ペロポネソス諸市はコリント地峡への後退を主張したが，それは海戦に有利だからではなく，もし敗れても着岸上陸すれば自陣営に帰れるからだった．後退の決議がいったんなされた後，テミストクレスは総司令を説きつけてもう1度会議を招集させ，サラミスが決戦場として最適であること，後退はサラミス，アイギナ，メガラの海上部隊ばかりか，アテナイの子女を敵に委ね敵の陸上部隊をペロポネソスに誘導することになること，そのときにはアテナイ艦隊も同盟から離脱する以外にないこと……と脅迫を交えて説得した．エウリュビアデスは辛うじて先の決議を取消し，サラミスを決戦場と定めた．

ペルシャ側海軍が大挙サラミスに押寄せ，配置につくと，クセルクセスも全軍を従えてサラミスの対岸にあらわれ，サラミス海峡の幅わずか2kmの最狭部を眼下に見下す小山の中腹に黄金の王座を据えて，観戦の態勢をとった．

圧倒的な敵の陣容を眼前にして，ギリシャ艦隊の中ではまた後退論が頭をもたげ，地峡以南と以北の都市の間で果てしない口論が再発した．ここからテミストクレスの大芝居がはじまった．

その夕彼は腹心の1人をクセルクセスの陣営に送り，テミストクレスはひそかにペルシャ大王に心を寄せ，その勝利を願っていること，ギリシャ軍は恐れをなして逃亡をはかり分裂に直面していること，逃走しようとするギリシャ船を見逃さなければ，大王の大勝利は疑いないこと，を告げさせた．深夜になってペルシャ側は艦隊の配置を変更し，海峡全域を封鎖した．

陶片追放を解除されたアリステイデスが，アイギナからの小船でペルシャ艦隊の隙間を縫って，サラミスに着いたのはちょうどその真夜中だった．テミストクレスがなおも後退派と口論をつづけているのを知ると，彼はその永年の敵対意識を一瞬に清算して，もうサラミスは包囲されて1隻の脱出も不可能であり，テミストクレスの戦略が唯一の選択であること，の説得にあたった．アリステイデスの信望はテミストクレスへの不信，反感を埋め分裂は辛うじて回避され，団結心が取り戻された．

夜が明けると狭いサラミス水道で両軍の船は激突したが，ペルシャ側には優勢の効果を発揮する機会はなく，事態は小型で敏捷なギリシャ船に有利に展開し，クセルクセスの艦隊は1日でその眼下に崩壊した．（つづく）

（わたなべ・ひろし　筑波大学社会工学系）

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．